

日本漢字音の促音化に関する研究

우 찬 삼
(한남대학교)

Woo, Chan-Sam. 2000. A study on the *soku-on*-ization of Sino-Japanese. *Linguistics* 8-1, 403-418. In the chinese characters of Japanese, when the morphemes of chinese characters - the underlined parts in iji(一), gaku(学)- combine with the other morphemes having a voiceless consonant and form chinese characters, the sound of 2mora-th in the before character is changed into *soku-on*. This phenomenon is called *soku-on*-ization. It appears when the sounds of 2mora-th in the before characters are -k, -p and -t, which are the last consonants of a syllable of ancient chinese. If the last consonant is -k, this phenomenon is called *kounai nissyou*, -p to *sinnai nissyou* and -t to *zetsunai nissyou*. This research presents the *soku-on*-ization of -k and -p of them, and shows whether which case the *soku-on*-ization appears or not. It also shows that what the reasons are, if the phenomenon doesn't appear. (Hannam University)

1.はじめに

現代漢語において漢語形態素、例えば「一(iti)」「法(hou)」「学(gaku)」などの2拍目の音が無声子音字を有する形態素と結合して漢語熟語を形成する場合、その形態素のつなぎ目(第2拍目音)に促音が出現することがある。一階(イッカイ)、学校(ガッコウ)、発達(ハッタツ)などがその類である。これを促音化と呼んでいる。この促音化について外山暎二氏(1972)は次のように述べている。

促音は漢字音の場合、入声音の開音節化したキ、ク(喉内入声)、フ(脣内入声)、チ(舌内入声)及び開音節化していない入声音-tがカ、サ、タ、ハ行音に接続する場合に 甲冑(カッチュウ)、答拜(タツパイ)などと現れる。

この記述からも分かるように、日本語の漢語熟語に促音が出現するのは、原則として前

部構成要素の第2拍目の音が中古音¹⁾(Ancient Chinese)の入声韻尾(-t, -p, -k)に属する場合に限られていることが分かる。この入声韻尾の中,-tである場合を舌内入声,-kである場合を喉内入声,-pである場合を脣内入声と呼んでいる。具体的な例をいくつか上げて見ると次のようである。

舌内入声字の促音化例

- t+k- 鉄筋(テツキン)
- t+s- 鉄石(テツセキ)
- t+t- 発達(ハツタツ)
- t+h- 出発(シュツパツ)

脣内入声字の促音化例

- p+k- 十回(ジツカイ)
- p+s- 十歳(ジツサイ)
- p+t- 十点(ジツテン)
- p+h- 十匹(ジツピキ)

喉内入声字の促音化例

- k+k- 学校(ガクコウ)
- k+s- 起らない(例:学生:ガクセイ)
- k+t- 起らない(例:確定:ガクテイ)
- k+h- 一部起る(例:六本:ロツボン)

上記の例を見ると分るように、三内入声字の漢語形態素が無声子音字を有する形態素、つまり-k,-s,-t,-pと結合して漢語熟語を形成する場合、その形態素のつなぎ目(第2拍目音)に促音が出現する場合と促音が出現しない場合とがある。

本稿では、喉内入声字の促音化と脣内入声字の促音化についてどの場合に促音が出現し、どの場合に促音が出現しないかなどを検討してみたい。このような研究の必要性を感じたのは日本語教育の現場で学生からときどき次のような質問を受けてからである。

1) 中古音とは KarlgrenのいうAncient Chineseの訳語であり、六朝後期から唐末、宋初までの音を総称するのに用いられる。

学生はガクセイであるが、なぜ学校はガツコウのようになりますか。

この質問はどの場合に促音化が起こり、どの場合に促音化が起こらないかということである。つまり学校(ガツコウ)、六本(ロツボン)のような漢語熟語には促音化が起こるのに、学生(ガクセイ)、学派(ガクハ)のような場合には促音化が起こらないかということである。これを明らかにするのが本研究の目的である。

2. 促音化が起こる条件

すでに述べたように、漢語形態素が無声子音字を有する形態素と結合して熟語を形成する場合、促音化が起こることがある。この促音化が起こるためには、次のような条件が必要である。

- 1) 前部構成要素が中古音の入声字(-p, -t, -k)であること
- 2) 前部構成要素の第2拍目が-ki, -ku, -ti, -tu, -pu(-u)であること
- 3) 後部構成要素の頭字音がk-, s-, t-, h-(p-)であること。つまりカ, サ, タ, ハ行の一つであること

この条件の2)と3)が結合して漢語熟語を形成する場合、促音化が起こり、後部構成要素の頭字音h-(ハ行)につながる際は、イチ(一) + ハイ(杯)がイッパイ(一杯)のようにh-がp-に変わる。つまり摩擦音が破裂音に変わる。これがいわゆる半濁音化である。それではなぜ促音化が起こるのだろうか。これについて喉内入声字と脣内入声字の促音化に分けて考察を進めることにする。

3. 喉内入声字の促音化

漢字音では音節の最後の子音を「韻尾」という。それが[-k]である場合を喉内入声韻尾, [-t]である場合を舌内入声韻尾, [-p]である場合を脣内入声韻尾といい、これらを総称して「三内入声韻尾」と言う。

喉内入声韻尾とは中古音の入声音中で韻尾字-kを持つ漢字音で、これらの漢字が日本に伝えられては日本語の音節構造である開音節によって-ki, -kuに日本語化して日本漢字音として定着し、今日まで受け継がれてきたということは周知のとおりである。

ところが,このような漢字音が語頭無声子音字を有する漢字と結合して漢語熟語を形成するとき,「学校(ガッコウ)」のように,促音化が起こる場合と「学生(ガクセイ)」のように促音化が起こらない場合がある.なぜ後部構成要素の漢字が同じ無声子音字であるのにもかかわらず,一方は促音化が起こり,一方は促音化が起こらないのか.日本語を学んでいる学習者たちが疑問を抱くところもこれである.したがって本節ではこれを明らかにしたい.

この目的を果たすために,まず促音化に関係がある漢字音,つまり喉内入声韻尾字を日本の常用漢字の範囲で確認して置くことにする.筆者の調べによると日本の常用漢字1945字の中で喉内入声字は次の203字である.

悪握域育易疫益液駅屋億憶各角拡革核殻郭覚較隔閥劃確獲赫穫学業岳額
菊却客脚逆虐曲局極玉劇激克告谷刻国黒穀酷獄作削昨索策酢搾錯冊式識
軸勺尺酌价积爵若弱寂叔祝宿淑肃縮塾塾熱色食植植飾触嘱織職辱夕斥石赤
昔析隻席惜責跡積績即束足促則息速側測俗族属賊続宅扱沢卓拓託濯諾濁
竹畜逐蕃築着嫡的笛滴適摘敵匿特得督德篤独毒読白拍伯迫泊博薄麦漠縛
爆百伏服副幅復腹履復履北木朴牧僕墨撲幕膜目黙厄役約訳薬躍抑欲浴翌
翼絡落酪陸力緑歴曆六惑

さて,上記のような喉内入声韻尾字がどのような場合に促音化が起こり,どのような場合に促音化が起こらないのか.この実態を一応日本語大辞典(1991)に登録されている形を基に調査してみた結果を表でまとめてみると次のようである.

[表1] 喉内入声字の促音化の実態²⁾

後部構成要素		k-	s-	t-	h-(p-)	用例
前部構成要素						
一般漢字	-ku	○	×	×	×	学校,国家,作曲,発起など
	-ki	△	×	×	×	激化,石棺,的確,適格など
漢数詞	-ku	○	×	×	○	六階,六本など

* 一般漢字: 喉内入声字203字中,六,百を除外した残りの字

○: 促音化が起こる場合

2) 具体的な例は下に示した.

×：促音化が起らない場合

△：「的確」のように促音化が起る形と起らない形との両方を認める場合

この[表1]を見ると分かるように、第2拍目が-kuで開音節化した喉内入声字の漢字音が後部構成要素の同一調音点を持つ漢字音k-につながる場合、一般の漢字、漢数詞を問わず、促音化が起る。そして後部構成要素のs-,t-を持つ漢字音につながる場合は一般漢字、漢数詞はすべて促音化が起らない。そして後部構成要素のh-を持つ漢字音につながるときは、一般漢字では促音化が起らないが、漢数詞の場合は促音化が起る。今まで述べたことについての具体的な例をいくつか上げて見ると次のようである。

[-ku]で開音節化した喉内入声字の促音化例

一般漢字

-ku+k- 全部起る ku+k=kk(ッ)に促音化
例：学校(gaku+kou = gakkou(ガクコウ))

-ku+s- 全然起らない
例：学生(gaku+sei = gakusei(ガクセイ))

-ku+t- 全然起らない
例：確定(kaku+tei = gakutei(ガクテイ))

-ku+h- 全然起らない
例：学派(gaku+ha = gakuha(ガクハ))

漢数詞

-ku+k- 全部起る ku+k=kk(ッ)に促音化
例：六階(roku+kai = rokkai(ロクカイ))

-ku+s- 全然起らない
例：六歳(roku+sai = rokusai(ロクサイ))

-ku+t- 全然起らない
例：六天(roku+teN = rokuteN(ロクテン))

-ku+h- 全部起る ku+h=pp(ッ)に促音化
例：六杯(roku+hai = roppai(ロクパイ))

次に第2拍目が-kiで開音節化した喉内入声字の漢字音が後部構成要素s-,t-,h-を

持つ漢字音につながるときは促音化が全然起こらない。しかし筆者が辞典で調査したことによると、後部構成要素のk-を持つ漢字音につながる場合は、促音化が起こる形で出現すること、促音化が起こらない形で出現すること、両方の形で出現することがあった。これらについて具体的な例をいくつか上げて見ると次のようである。

促音化が起こる形で出現すること(促音形のみ認め)

例：石火,赤禍,赤化,石灰,石塊,石槨,赤葛色,石器,赤旗,積極,石窟,
赤血球,石鹼,剔抉など

促音化が起こらない形で出現すること

例：益金,易経,劇化,劇界,石化,石果,敵国,碧海など,

両方の形で出現すること

例:液化,激化,激高,石棺,夕景,隻句,的確,席卷,適格,摘記,適帰,適期など

さて、なぜ-k_iで開音節化した喉内入声字の漢字音が後部構成要素k-を持つ漢字音につながる時、促音化が起こる場合と起こらない場合、あるいは両方の形で出現することがあるか。以下では-k_i+k_iのときに促音化が起こる理由について詳しく検討してみたい。

3.1 促音形が出現する理由と出現しない理由

この喉内入声字の促音化は漢字音の日本語化ということの一部に属するものとしてその代表的な解釈は浜田敦氏(1949)である。本稿と関連がある一部を引用してみると次のようである。以下浜田氏の説を引用してその問題点を指摘してみる。

(略)学校の如き喉内のものにあつては、下部要素がやはりカ行音で始まる「校」の如き文字の場合に限って「ガッコウ」の如く促音化するもので、其の他の場合は、たとえば「學生」「學徒」「學派」の如きいづれも「ガクセイ」「ガクト」「ガクハ」であつて決して「ガッセイ」「ガット」「ガツパ」とはならないのである。これは云ふまでもなく、かかる入聲の文字が、たとえ本来は子音kで終わるものであつたにしても、それが國語に取り入れられる際にはu(惑いはi)と云ふ母音を添へてガク(gaku)などとして發音された爲であること

従来も屢屢説かれてゐた處である。従つて「學校」がガッコウとなつたのも決して「學」が本來子音で終わる文字であると云ふ理由からではなくしてgaku-kauの如き同一の清子音kの間に挟まれた狭母音uがまず無聲音化し、ついで脱落したことによるものであつて、この場合も古くはガクカウであつたと考えるべきものと思はれる。

喉内入声字の促音化は上に説かれているように、中古音の韻尾-kが日本漢字音としては一旦-kuあるいは-kiのように開音節化した後、無声子音の間に挟まれた母音が無聲化し、ついで脱落したという一種の子音同化現象であると言えよう。

さて、浜田氏は「同一清子音」に挟まれた場合を強調したが、これは現代語の実態とは合致しないことがある。即ち「六本(ロッポン)」「百万(ヒャッポウ)」などのように、同一清子音ではないハ行音が下接した場合にも出現しているからである。

要するに、喉内入声字の促音化は原則として中古音の韻尾が-kuで開音節化した漢字音であることと後部構成要素が無声子音字の中、同じ調音点を有する無声軟口蓋閉鎖音であることが条件づけられる。但し前部構成要素が漢数詞の場合は例外として無声声門摩擦音h-である場合もすべて促音化が起こるとまとめることができる。

それでは、なぜ後部構成要素に無声歯茎摩擦音s-とか無声歯茎閉鎖音t-とかが下接した場合は全く促音化が起こらないのだろうか。その理由について探ってみることにする。

入声韻尾字の促音化は他の舌内入声韻尾字-t、脣内入声韻尾字-pにも同様に発生するが、舌内入声韻尾字、脣内入声韻尾字は下の例のようにk-, s-, t-, h-が下接した場合、即ち後部構成要素の頭子音が無声子音字である場合はすべて促音化が起こる。舌内入声韻尾字の例としては、鉄筋(テツキン)、鉄石(テツセキ)、発達(ハッタツ)、出発(シュツパツ)などをあげることができ、脣内入声韻尾字の例としては、十回(ジツカイ)、十歳(ジツサイ)、十点(ジツテン)、十匹(ジツビキ)などをあげることができる。

ところが、なぜ喉内入声韻尾字の場合は原則として同一調音点を有するカ行音である場合だけに発生するのだろうか。それは生理的な理由によつてゐるのではないかと考えられる。即ち無声子音の間に挟まれた母音は全ての場合に無聲化した、もつとも奥よりの軟口蓋閉鎖音-kは同じ調音点を持つ下接音k-にスムーズに同化したのに対して調音点が離れていたs-, t-の場合には奥から前への調音点の移動が行われにくかつたのにその原因があると考えられる。田村宏(1990)によると、日本語の促音と撥音は後続子音に同化された一種の子音同化現象で、日本語の子音同化の特徴として調音点の同化を指摘しているが、これと関係があるだろう。

そうすると、h-頭子音が下接する場合に現代語で促音化した例が見られるが、これはど

う説明すればいいだろうか、その理由について触れてみたい、ここで注目されるのは現代語におけるk-頭子音以外の促音化はh-に限られ、しかもその具体例が「六法(ロッパウ)」「百方(ヒャッポウ)」のように前部構成要素の漢字が数詞に関するものに片寄っているという事実である。(一般漢字として辞書に掲載されているのは「北方(ホッポウ)」くらいである)。これらについての解明は語彙史的な問題を内包しているもので、ここでは指摘だけをしておきたい、ただ一つ言えることは「六法(ロッパウ)」「百方(ヒャッポウ)」などの語は日常語としてあるいは頻用語として多く使われたために、この促音化形がそのまま辞書に登録されて今日まで受け継がれてきたと考えられる。

現代日本語辞典類では上記のように喉内入声字の一般漢字に無声子音字k-がつかない場合、促音化形が辞書形として掲載されていて、漢数詞「六」「百」につながる場合は、無声子音字k-以外にh-がつかない場合も促音化形が辞書形として掲載されている。現実には「百足」「百体」などの促音形が日常語形(口語形)としては出現することがあるが、これらの日常語形が辞書に登録されていないのも慣用度がそれだけ低く、まだ十分に熟していない段階であるということがそれを裏づけている。

3.2 喉内入声字の促音化のまとめ

最後に現代語の喉内入声字の促音化をまとめてみると、中古音の喉内入声字が-kuで開音節化した漢字音に無声子音-kがつかない場合はすべて促音化が起り、漢数詞の「六」「百」の場合は無声子音k-だけではなく、h-がつかない場合も促音化が起る。そして「赤(se-ki)」「的(te-ki)」のように喉内入声字が-kiで開音節化した漢字音は後部構成要素の無声頭子音字の中、k-につながるときだけ促音化が起り、無声頭子音字s-,t-,h-がつかない場合は促音化は起らないのが原則である。しかし現実漢字音をみると「的確(テッカク、テキカク)」のように両方認められている場合と「赤化(セッカ)」のように促音形のみが認められている場合と「易経(エキキョウ)」のように促音形が認められていない場合がある。このように三つの形が現れる理由は慣用度が低いか、あるいは十分に熟していない段階であるかということに大きな原因があると考えられる。この場合一つの規則を設定するのは難しいが、何か傾向は見られるようである。その傾向は「赤化(セッカ)」「石灰(セッカイ)」「積極(セッキョク)」のように前部構成要素の漢字音がサ行である場合は促音形だけが認められ、「激化(ゲッカ、ゲキカ)」「石棺(セキカン、セクカン)」「的確(テッカク、テキカク)」「適格(テッカク、テキカク)」のように前部構成要素の漢字音がガ行、サ行、タ行の場合は両方の形が認められ、それ以外の漢字音の場合、促音形は認められていない傾向がみられる。いままで述べたことを分かりやすく記

号で示してみると次のようになる。

1. -ku+k-の場合

すべて促音化が起こる。

用例) 悪化,各個,学校,国家,作家,六回,百貨店…

2. -ku+h-の場合

漢数詞に限って促音化が起こる。

用例) 六法,六方,百発,百方…

3. -ki+k-の場合

この場合は三つの形が認められている。

1) 両方認められている形

用例) 激化,的確,敵国…

2) 促音形のみ認められている形

用例) 赤化,赤旗,石灰,石器,石鹼,積極…

3) 促音形を認められていない形

用例) 益金,易经,劇化,劇界,石化,,敵国…

4. 唇内入声字の促音化

唇内入声字とは中古音の入声音中で韻尾字-pを有する漢字音で,これらの漢字が日本の常用漢字1945字の中には総43字があげられている。唇内入声字で問題になるのはどの場合に促音化が起こり,どの場合に促音化が起こらないかという問題より先に述べなければならないことは,なぜ中古音の入声韻尾字-pを有する漢字音が日本漢字音では-pu(-u)音形と-tu音形に出現するのかである。

中古音で唇内入声韻尾-pを有する漢字を唇内入声字という。これらの漢字が日本に伝えられては喉内入声字と同じく日本語の音節構造である開音節に合わせた形である-puに開音節化する。このように中古音の-pが一旦日本語の音節構造CVに会う-puで定着したのであるが,これが時代が下がるにつれ摩擦音化を起こして-φuと変わる。その後この-φuが平安時代に現れはじめたハ行転呼音³⁾の影響によって-uに変化し,今日の

3) ハ行転呼音とは「食ふ(kuφu)」→「食う(kuu)」のように語中,語尾のハ行音がワ行

漢字音では前接の母音と融合して長音化した形で定着している。この過程を「甲」を例にあげて示すと次のようである。4)

甲 : kapu > kaϕu > kau > kou > koo

中古音の脣内入声字が今日の日本漢字音で-uに定着するのは上記のように複雑なprocessを経ているが、実はこれが正則的な変化過程である。これを立証するのが韓国漢字音である。韓国漢字音では中古音の脣内入声字は例外なしに-pで現れている。しかし日本漢字音を見ると-uで現れる以外に「圧(a-tu)」「湿(si-tu)」「接(se-tu)」などのように-tu「-ツ」として定着している漢字音がある。本来-ツは中古音の舌内入声字が日本漢字音で正則的な変化を経て定着した音であるところが、なぜ脣内入声字が正則的な変化を経ず、舌内入声字の正則変化である-ツのように定着しているのだろうか。また脣内入声字の促音形はどのような条件下で出現するのだろうか。その実態と原因を究明するのが本節の目的である。

4.1 脣内入声字である日本漢字音の実態と促音化

まず、もともと脣内入声字である日本漢字音の実態を現代の常用漢字音訓表の範囲で調べて表で示してみると[表2]のようである。

[表2] 脣内入声字である日本漢字音の実態

中古音の脣内入声韻尾	日本漢字音及び字例		韓国漢字音
	日本常用漢字音	字例	
-p	-u(-ウ)形	押凹及泣級急給協峽狹脅甲業 習集襲拾汁灑涉疊挿塔搭答踏 入乏葉粒獵(31字)	-p(-ㅍ)
	-tu(-ツ)形	圧湿接摂(4字)	
	-u(-ウ) -tu(-ツ)形	合雑執十納法立(7字)	

音に転じることをいう。

4) 詳細は拙稿(1992)を参照されたい。

- * 上表の韓国漢字音で-p(-ㅍ)の意味は日本漢字音の字例で上げた漢字が韓国漢字音ではすべてパチム「-ㅍ」に現れるという意味である。

中古音の唇内入声字であった漢字が昭和56年(1981)に内閣告示となった日本語の常用漢字音訓表には総43字⁵⁾があげられている。これらの漢字音の第2拍目をみると、上表のように三つの形で現れる。すでに述べた通りに中古音の唇内入声字が時代に応じて音韻変化の過程を経て今日の日本漢字音の-u形で定着している。これが唇内入声字の正則的な日本音化である。このような漢字音が常用漢字音訓表には31字採用されている。これらの漢字は後部構成要素として無声子音k-,s-,t-,h-を有する形態素、つまりカ行,サ行,タ行,ハ行と結合して漢語を形成するとき、全く促音化が起こらない。具体的な例をいくつか上げて見ると次のようである。

[-u]で開音節化した唇内入声字(全然促音化しない)

-u+k-

例：甲骨(kou+kotu = koukotu(コウコツ))

-u+s-

例：給紙(kyuu+si = kyuusi(キュウシ))

-u+t-

例：急転(kyuu+teN = kyuteN(キュウテン))

-ku+h-

例：急派(kyuu+ha = kyuha(キュウハ))

次に、常用漢字音訓表に単独音形として-tu(-ツ)だけが認められている漢字がある。例えば「圧(アツ)」「接(セツ)」「摂(セツ)」「湿(シツ)」がそれである。これらの漢字は後部構成要素に無声子音k-,s-,t-,h-が下接して漢語になる場合、「圧巻(アツケン)」「圧迫(アツパク)」「湿気(シツケ)」「接頭(セツトウ)」「摂取(セツシュ)」のようにすべて促音形になる。

唇内入声字の促音化で一番問題になるのは-u,-tu(-ウ,-ツ)の両方形が認められている「合, 雑, 執, 十, 納, 法, 立」の7字である。これらの7字のうち、「合, 十, 納, 法」の4字は単独音形としては「-ウ」が認められ、「-ツ」は熟語中の促音形のみとし

5) 常用漢字音訓表に43字掲げられているが、上表の漢字の数字が42字になるのは「扱う」という漢字の音がないからである。

て認められている。従ってこの場合の「-ツ」は小さく書く「-っ」であげられている。そして「雑, 執, 立」の3字は単特音形として「-っ」「-ウ」の両形が認められている。それではこれらの漢字がどの場合に促音形(-っ)として現われ,どの場合に長音形(-ウ)として現われるか,これを調べてみた結果を示してみると[表3]のようである。

[表3] 両音形の認められている漢字の促音化の実態

後部構成要素 前部構成要素		k-	s-	t-	h-(p-)	用例
漢字	音形					
合	ゴウ	○	○	○	○	合計, 合資, 合著, 合法
	ガッ	×	○	○	○	合作, 合致, 合併
十	ジュウ	×	×	×	×	
	ジッ	○	○	○	○	十回, 十歳, 十本
納	ノウ	○	×	×	○	納期, 納付
	ナッ	×	○	○	×	納所, 納得
法	ホウ	○	○	○	○	法官, 法式, 法治, 法服
	ハッ	×	×	○	○	法度, 法被
	ホッ	○	○	○	×	法界, 法華, 法主, 法体
雑	ザッ	○	○	○	○	雑菌, 雑誌, 雑多, 雑費
	ゾウ	○	○	×	○	雑巾, 雑炊, 雑兵
執	シッ	○	○	○	○	執権, 執政, 執達, 執筆
	シュウ	×	○	○	×	執心, 執着
立	リッ	○	○	○	○	立脚, 立身, 立冬, 立派
	リュウ	×	×	×	×	

常用漢字音訓表で両音形が認められている上記のような漢字音に無声子音字が下接して熟語を形成するとき促音化として現れるか,長音形として現れるかを調べるために,日本語大辞典に掲げられている漢語を調査してみた。その結果を表したのが[表3]である。

上表をみると分かるように「十」「立」は無声子音字k-,s-,t-,h-が下接したとき,すべて促音形が現われ,長音形は現われない。それ以外の場合は何か特別な傾向は見あたらぬ。その理由として考えられるのは現代の常用漢字音訓表の漢字音は現代の常用語を基盤にして決定された一つの姿であるからであろう。即ち昭和23年(1948)の当用漢

字音訓表では「合(ガッ),納(ナッ),法(ハッ,ホッ)」などの促音形は認められていなかったが,昭和48年(1973)の改訂音訓表から促音形が認められ,昭和56年(1981)の内閣告示による常用漢字音訓表までに引き続けられてきたことに大きな原因があるのではないかと考えられる。これを分かりやすく整理してみると次のようである。

漢語	当用漢字音訓表 (23年)	改訂音訓表 (48年)	常用漢字音訓表 (56年)
合戦	カフセン	カッセン	カッセン
納得	ナフトク	ナットク	ナットク
法度	ハフト	ハット	ハット
法橋	ホフケウ	ホッキョウ	ホッキョウ

4.2 唇内入声字の促音化,促音形が現れる理由

今まで唇内入声字を有する漢字音が日本漢字音でどのような形で現れるかを常用漢字音訓表に基づいて調査してきた。それでは中古音の唇内入声字が日本漢字音で正則的な変化によって-uで現れるはずであるが,舌内入声字の正則的な変化である-tuで現れるのはなぜだろうか。これについて考えてみたい。

山田孝雄氏(1970)は唇内入声字の実態を筆者とほぼ同じく四つに分類している⁶⁾が,なぜ-tuが現れるかについての説明は述べずに,入声として現れる状態は一樣ではないと述べるのに留まっている。しかし浜田敦氏(1949)は次のように唇内入声字の促音化の理由と一部の漢字が促音形に定着したことを明らかにしている。関連部分を引用してみると次のようである。

唇内のもの,即ち原音で子音pに終わったと考えられるものは,固有の國語におけるハ行動詞の音便の場合と同様而もそれと関連して極めて問題が複雑である。現代語における状態は上にあげた如き,「カッセン(合戦))の如く促音化する

6) 山田孝雄氏(1970)の第五章で唇内入声字の実態を(イ)「ツ」「ウ」との二様を有するものあり,(ロ)入声として用いられる時と「ウ」の韻との二様を有するものあり,(ハ)おもとして「ウ」韻の音として用いられるものあり,(ニ)主として「ツ」の尾音として用いられるものあり,のように四種類に分類している。

るものと「ゴウケイ(合計)」の如く長音化するものとが雜然と入りまじっているかの如く見える。

(略)元來この唇内の入聲音は本國においては子音pで終わるものであったが、わが國に採り入れられる場合少くとも平安以降においてはFの形となり、而も一般に母音Fuと發生したものと考えられる。かかる摩擦音+母音uの音節が清音カ、サ、タ、ハ行音を伴った場合何故促音となり得たのであるかと云うことについては從來何の説明も與えられていなかった様である。

(略)かかる一般國語フ音の追勢に伴ったものとすれば、唇内の入聲音は上あげた二種類のうちの後者、即ち長音形を採るものがむしろ正常なる形と云うべきであって事實平安朝頃の日記物語類に現れるものも、從來の慣用に従って讀む限りやはり長音形が大部分を占めるものであり、(略)此唇内入聲音の促音と長音への分化に對して恐らく二様の説明が可能であらうと思う。即ち一は、ハ行四段活用の動詞に於いて促音便とウ音便との分化が見られること、及びヲヒト(夫) シヒト(舅)の如きも同一語根を含むと考えられるものが、やはり一は促音形ヲット、一は長音形シュウトに分化したことなどと同じ理由、即ち母音uと促音との調音部位の類似性から説明することである。他の一は吳音、漢音など古代音にもとづく長音形の層が、院政、鎌倉期頃新しく輸入された所謂宋(唐)音による促音形のそれによって浸蝕されたものと解することである。(略)唇内の入聲音の中促音化するものが、比較的新しい傳來と覺しき、殊に佛教關係の語に見られることも、この宋音の影響を物語るものではなからうか。(略)以上二の考え方のいづれを採るべきかについては私にも今の處はっきりした斷案を下し得ないが、或はその雙方の理由によるものが混じっていると云うことも考えられるであらう。なお現代語では上述の如く促音、長音が雜然と混じってはいるが、傾向としては、その雜然さを脱して何等かの統一に向はうと云う動きが見られると思う。即ち促音形、長音形が個々の漢字について固定すると云う動きがある。従って「法」の如き、かつては「ホツソク(法則)」と云う促音形の存したものが失われ、一方「雜」「立」など多くのものは「コシツ(固執)」「コンザツ(混雜)」「コリツ(孤立)」の如き下部要素に立った場合も「ツ」を以って表記され、發音も舌内 t 韻尾のものと同じになると云う現象が見られるのである。

以上のように、広範囲にいたる問題点の指摘とそれ等に関する興味ある解釈が加えられている。また小松英雄氏(1956)はもともと唇内入声字であった漢字が舌内入声字に変わる過程を次のように音聲的側面で述べている。

- 1) 韻尾の- ϕ uがサ行音などの無声子音と緊密な結び付きで結合するため,uが無声化して脱落する。
- 2) 残された韻尾- ϕ は極めて不安定な形であるため,そのままで存続することができず,もとの一moraを保存して促音-qにおきかえられた。
- 3) そしてこれらのうち,語性上のこの様な結合がその使用率の圧倒的部分を占める一部の文字は常に「ツ」表記をとるため,遂に舌内入声と誤認され,無声子音に続く以外の場合でも-tと発音されるようになり,現行の-cuにまで変化した。

この両博士によって唇内入声字の促音化の理由及び一部の漢字が促音形「-tu」で定着した理由は大体解明されたと言える。即ち,浜田氏は理由に母音uと促音との調音部位の類似性と新しく入ってきた宋音の影響の二つを挙げている。これに対して小松英雄氏は浜田氏の主張した宋音の影響については「いわゆる宋音がこの問題に全く無関係であったと言うことはできないであろう。しかしそれはあくまでも側面的,間接的-つまり上の変化が起りやすいような基層的条件を国語音の条件に与えたこと-に留まるものである」とする見解を示している。

5. おわりに

以上のように唇内入声字を有する日本漢字音を常用漢字音訓表に基づいてその実態と促音化する理由と促音形が現れる理由を日本語大辞典と先行研究を通じて調べた。それをまとめてみると次のようになる。

- 1) 大部分正則的な変化を経て今日の「-ウ」で定着していることが分かる。これらの字の場合は単独形も熟語形もみな「-ウ」で現れる。つまり下接字に無声子音k-,s-,t-,h-が結び付いて熟語になる場合も促音化にならない。
- 2) 舌内入声字の正則的な変化である「ツ」形で定着しているものが「圧」「湿」「接」「摂」の4字ある。これらの漢字の場合,単独形も熟語形も「-ツ」で,無声子音字が下接した場合は「圧巻(アッケン)」「湿気(シッケ)」「接触(セッシュョク)」「摂取(セッシュュ)」のようにすべて促音化が起こる。この類の漢字としてよく使われる表外字は「拉致(ラッチ)」の「拉」がある。
- 3) 単独形としては「-ウ」のみが認められ,熟語形の中に「-っ(促音形)」がみとめられているものが「合」「十」「納」「法」の4字ある。この中「十」は無声子音が下接した場合すべて促音化するが,「合」「納」「法」は無声

子音字が下接した場合,促音化が起こる場合と促音化が起こらない場合がある.ある傾向は見あたらないが,「法」の場合をみると現代漢語では下接字に無声子音字k-,s-,t-,h-がつながっても促音化が起こらない.例外が若干あるが,その例外は「法界」「法華」「法体」「法度」「法被」などのように仏教関係の漢語に集中していることは興味深いことで,これから研究を要するところである.

- 4) 単独形として「-ツ」と「-ウ」の両形が認められているものが「雑」「執」「立」3字ある.これらの字に無声子音字が下接した場合,「雑誌(ザッシ)」「執行(シッコウ)」「立候補(リッコウホ)」のようにほとんど促音化が起こる.例外が若干あるが,その中で日常語としては「雑巾(ゾウキン)」「雑炊(ゾウスイ)」くらいがある.

参考文献

- 外山映二.1972.“近代の音韻,”講座国語史2 音韻史,文字史,大修館書店.
 金田一春彦外3.1991.“日本語大辞典”,講談社.
 浜田敦.1949.“促音と撥音,”人文研究第一卷一号,大阪市立大学紀要.
 田村宏.1990.“日本語の子音同化に見られるいくつかの特徴,”九州大学留学生センター紀要第7号.
 山田孝雄.1970.“国語中における漢語の研究,”宝文館出版(複製).
 小松英雄.1956.“日本漢字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程,”国語学25輯.
 大蔵省印刷局.1991.常用漢字表.
 禹 燦 三. 1992.“常用漢字の韓日対応関係について -漢字音を中心に-,”教育学研究紀要第38巻,中・四国教育学会.

禹 燦 三

306-791 大田市 大徳區 梧井洞 133番地
 韓南大學校 文科大學 日語日文學科
 E-mail wcsam@hanmail.net